

## 魔法少女は臭くて大きい？（加筆修正前）

「科学」とは「物事を肯定する事」から始まる。

例えば、UFOの写真。

インチキだと一蹴するのは容易いが、それでは「科学」とはいえない。

とにかく「写真に写っている物体」の存在そのものは肯定しなくてはいけない。

その上で、それが何であるかを調べる。

最終的に「写真に写っている物体」が「単なる模型」だったとしても、それを知るまでの過程こそが「科学」なのだ。

さて、前置きはこのぐらいにして、俺——<sup>にとぅ</sup>仁藤シュンヤも目の前の物体を肯定するところから始めるとしよう。

それは円筒形の代物で、中には何本かの細長い棒や巨大な2枚刃の物体が入れられている。要するに、何処にでもあるペン立てに定規とハサミが入っているだけなのだが、問題はその大きさである。

明らかに俺より大きく、定規に至っては俺の身長の3倍はありそうだ。

「どうなってるんだ？」

考えられるのは、2つの可能性。

1つは、周囲のものが巨大化したという事。

そして、もう1つは——

「あっ、目が覚めた？」

ふいに周囲が巨大な影に呑み込まれ、頭上から声が降ってきた。

見上げると、1人の巨人が俺を見下ろしていた。

見た目は俺と同じ1●歳ぐらいの少女だが、その大きさはウ○トラマン並だ。

セミロングにした黒い髪とは対照的に肌は白く、そのコントラストが美しい。

体型は全体的にむっちりとしており、胸は・・・Cぐらいだろうか。

今の俺にはよくわからないが、それでも大きいと思える形の整った尻は特筆すべきだろう。

「誰だ、お前は？」

あまりに現実味がないためか、驚くほど冷静に尋ねる事ができた。

「そっか。自己紹介がまだだったね」

そう言うと、少女は膝を曲げて視線を俺に合わせた。

「まず、自己紹介からだね。私は美堂びどうコヨミ。あなたを小さくした魔女よ♪」

「魔女？」

俺はおうむ返しに問い掛けた。

トンガリ帽子と黒マントを着けているとは言わないが、学校の制服らしい濃紺のブレザーを着た魔女というのは如何なものだろうか。

しかも、空いてる方の手にはガーリック味のスナック菓子を持ってるし。  
とはいえ、現状を見る限り、彼女が何らかの方法で俺を小さくしたのは間違いなさそうだ。  
(そうなると、俺は7cmぐらいまで小さくなっているのか)  
「それで、どうして俺を小さくしたんだ？」  
「順を追って説明するね。まず、私はこう見えても大正生まれのお婆ちゃんなんだけど、魔法薬で若さを保ってるの」  
「お決まりの設定だな」  
「まあね。とはいえ、副作用がない訳じゃないわ。魔法薬で全身の細胞が活性化するから、とにかくお腹が空くのよ」  
「それでお菓子の袋が山積みになってるのか」  
「ご名答♪でも、副作用はそれだけじゃないの。たくさん食べるという事は、当然ながら消化器官も活性化するのよ」  
そう言いながら、コヨミが立ち上がってスカートを脱ぎ始める。  
「な、何をしてるんだ!？」  
露わになった白いショーツを見ながら、俺は戸惑いと驚きの声を上げる。  
コヨミはそんな俺を片手で掴み上げると、そのまま自分の尻の方へと持っていく。  
ちょうど彼女の尻に俺の頭が突き付けられているような格好だ。  
「言ったでしょ。消化器官も活性化するって。そうするとね・・・んっ♪」  
直後、

**ボフフウウウーッッッ！！！！**

地の底から響くような重低音と共に、顔面にももの凄い勢いの熱風が浴びせられた。  
「ぐはっ!？」  
強烈なニンニク臭を伴った熱風。  
出てきた場所から考えても、それは間違いなく――  
「こんな風にくっさいオナラがブーブーたくさん出ちゃうの♪」

**ブブブウウウーッッッ！！！！**

楽しげに説明しながら、2発目の<sup>オナラ</sup>熱風を放つコヨミ。  
「ぐふっ!？」  
1発目を凌ぐ濃厚なニンニク臭が鼻の中を暴れ回り、視界がぐるぐると回転する。  
「いつもは1人でガス抜きしてたんだけどね。たまには誰かに嗅がせるのも面白いかなっ





ブビビビビビビイイイイイイイイ〜〜〜ツツツ！！！！

安堵したのも束の間、コヨミが豚の鳴き声のようなオナラを放った。

「ぐふっ・・・！」

その凶悪な悪臭<sup>におい</sup>に耐え切れず、俺の意思は闇に呑まれていった。

\*

意識が覚醒して、最初に視界に映ったのは巨大なペン立てだった。

「・・・」

残念ながら、先程までの事は夢ではなかったようだ。

「ようやくお目覚めね」

耳に届いたコヨミの声に違和感を覚えつつ、声のした方に視線を向ける。

「なっ！？」

次の瞬間、俺は驚きの声を上げた。

理科室のような机に山積みになったお菓子を、2人のコヨミが向かい合って食べていたのだ。

両者ともスカートを脱いでおり、いったいどちらが先程までのコヨミなのか見当も付かない。

「ふ、双子だったのか？」

俺が驚きを隠せずに問い掛けると、

「ああ、これ？こっちは私が作った鏡像<sup>ヨビ</sup>。あなたから見て、右側にいる私が本物よ」

2人のコヨミが互いを指差しながら説明してきた。

言われてみると、両者の動きが完全に左右対称となっているのがわかる。

「ずっとパンツの中でオナラを嗅がせるのも芸がないしね。今度は少し趣向を変える事にしたの」

2人のコヨミが左右対称の動きで俺に人差し指を向けると、俺の身体がふわりと浮かび上がる。

そのまま俺が2つの机に挟まれた空間で静止したのを確認し、2人のコヨミたちは同時にショーツを脱ぎ始めた。

「っ！？」

形の良い豊満な尻が露わになり、俺は咄嗟に2人から視線を外す。

「別に見てもいいのに」

そんな俺を可笑しそうに見ながら、2人は同じ動きで俺の前後に立った。

「じゃあ、第2ラウンド。私たちのお尻サンドイッチを始めましょうか♪」



そもそも今の俺にはすかしっ屁だろうと、十分に大きな音である。

「休憩の間に、だいぶ回復したみたいね。まだそんなに叫ぶ余裕があるなんて」

コヨミたちが何か言っているが、それに反応するだけの力は残っていない。

「だったら、もう少し虐めちゃおうかな♪」

ふいに2人のコヨミが離れた瞬間、

「っ!？」

俺の身体に異変が起こった。

依然として宙に浮いたままだが、7cmほどだった身長が20cmほどまで大きくなったのだ。

(何をする気だ?)

コヨミの意図は読めないものの、身体が大きくなったのは有り難い。

これで少しはオナラのダメージも小さく――

「っ!？」

安堵したのも束の間、直後に訪れたのはさらなる絶望だった。

**ぎゅむっ!**

俺の身体を押し潰す尻が2つから3つに増えたのだ。

「「やっぱり、このぐらいのサイズじゃないと、トリプルサンドはやりにくいわね」」

要するに、3人目が入るスペースを確保するために、俺の身体を少し大きくしたらしい。

「「さあ、どんどん行くわよっ♪んんっ♪」」

**ブボボボボボボボボオオオオオーオーツツツ!!!!**

**ボッフウウウウウウウウウウウーオーツツツ!!!!**

**ブブブブブブウウウウウウウーオーツツツ!!!!**

ニンニク臭、チーズ臭、それが2つが混ざったにおい悪臭。

3種類のオナラが混ざり合い、俺の鼻に襲い掛かってくる。

「ふぐうっ!？」

身体が中途半端に大きくなった事で鼻に流れ込むオナラの量が増加し、身体へのダメージがさらに増大する。

それにしても、本当に楽しそうだ。

俺にオナラを浴びせるのを心底楽しんでいるのだろう。

「「う～ん、どうも3人だと座りが悪いわね」」

そんな不吉な事を言いながら、3人のコヨミが再び俺の身体から尻を離す。

直後、

**ぎゅむっ！**

今度は四方から4つの尻が俺を押し潰した。

「「これで座りがよくなったわね。んんっ♪」」」

**ブッフイイイイイイイイイイイイイイイイツツツ！！！！**

**プウウウウウウウウウウウウウウウウ～～～ツツツ！！！！**

**プピイイイイイイイイイイイイイイ～～～ツツツ！！！！**

**プッププッププッププッププウ～～～ツツツ！！！！**

楽しげにオナラの4重奏を奏でるコヨミたち。

前後からニンニク臭、左右からチーズ臭。

四方を完全に塞がれているため、逃げ場のないオナラが容赦なく俺の身体へと流れ込んでくる。

「～～～～～っ！？」

身体が内側から腐っていくような感覚に、もはや声を上げる事もできない。

(も、もうダメ、だ・・・)

再び意識を失いそうになる俺の耳に、

「「「そういえば、上がまだ空いてるわね」」」

コヨミのさらにとんでもない眩きが聞こえてくる。

間を置かず、

**ずしっ！**

頭頂部に新たな圧迫感が生まれた。

確認するまでもなく、コヨミが4人目の鏡像<sup>コピー</sup>を生み出したのだろう。



「『『『『これでラストよ♪』』』』」

ブボボボボボボボオオオオオオオーオーツツツ！！！！

ブベベベベベベベベベベベベベベベベベベベベベツツツ！！！！

ブブブッスウウウウウウウウウウウウウウウウツツツ！！！！

ブッフオオオオオオオオオオオオオーオーツツツ！！！！

ブブブブブブブブブブブブブブブブブウツツツ！！！！

「—————！？」

前後左右、さらに頭上から浴びせられる5発のオナラ。

逃れようのない凶悪な臭気の包囲網の中で、俺は完全に意識を失った。

\*

目を覚まして最初に感じたのは、違和感だった。

手足が動かない。

というか、手足の感覚がない。

視界も真っ暗で、此処が何処なのかもわからない。

『どうなってるんだ？』

「お目覚めの気分はどうかしら？」

状況が呑み込めずに戸惑っていると、コヨミの声が降ってきた。

『俺に何をした？』

「あなたが寝ている間に、ちょっと魔法を掛けさせてもらったの。ほら、見て」

ふいに視界が明るくなる。

次の瞬間、

『なっ！？』

俺は驚愕の声を上げた。

目の前に置かれた大きな姿見。

そこにはスカートをたくし上げ、鏡の方へ尻を突き出したコヨミが映っている。

問題は彼女の尻を包む白いショーツ。

そこに薄っすらとだが、俺の顔が浮かんでいる。

つまり、彼女の言う魔法とは――

「驚いた？気分が乗ってたから、あなたをショーツにしてみたの♪」

そう言って、

**ブボッ！**

コヨミが尻を突き出したままオナラを放つ。

『んぐっ！？』

ショーツに鼻はないはずだが、その悪臭は確実に俺へと襲い掛かってくる。

「あっ、学校や家の事は心配しなくていいわよ。これを見て」

そう言いながら、コヨミが尻を突き出したまま、身体を90度回転させる。

直後、

『なっ！？』

俺は再び驚愕の声を挙げた。

目の前に、俺と全く同じ容姿の少年が立っていたのだ。

「私が作った鏡像よ。さっきの簡易型とは違って、自立型なの。1週間の連続稼動が可能で、本物と記憶を共有する事もできるわ。凄いでしょ？」

「・・・」

つまり、少なくとも1週間、俺は彼女のショーツでいなければならないという事だ。

「取り敢えず、鏡像にあなたの家へ帰ってもらうわ」

コヨミの言葉を受けて、鏡像の俺が部屋を出ていく。

「さて、あっちは鏡像に任せて、晩御飯にしようかな。その後は、楽しいオナラタイムだよ♪」

そう言って、彼女はたくし上げていたスカートを元に戻す。

物理的にも精神的にも目の前が真っ暗になった。

**終**